小樽新聞社
緑丘新聞

資本主義は何處へ行く（一）

手塚豊郎

資本主義の運命を論じ、資本主義の行く手を論ずるのは今に始まったことではない。然し論究は近頃盛るし（盛）に行はるゝに至ったのみならず、傳（傳）べき理論的思想の影響を受けて、また我国に於ては特に此たびの戰爭時の經濟の影響を受けて、新なる動機をとるに至った。具體的に云へば、此論究は著しく擬人化されて来たのである。かつては此論究は專門家の間にしか行はれなかった。資本主義をけなす者は共產革命の理論家であり、イリタンであった。それを讃歌する者は國粉經濟學者であった。それが今や著しく變化して、大衆が此論究に參加してゐる。但し此の變化を受けなかった部類は無かったし、現に目下の戰時經濟の影響を受けない者もない。恐慌時にあっては、資本主義社會に特有な現象が大衆の眼前につきつけられた。ヨーロッパがサンパウロの神に救援された時、國粉に失された部類は、丁度小説がマルセイユの神に救援せられた部類が流（フ）ローリエの詩を行ったと同樣に、人々の胸に迫って、かゝる現象をあらしむる經濟組織に對して重大なる疑問をもたしめずには置かなかった。また戰爭の進行に物資を調達し、同時に戰後の生活を安定せしめんがために、相當に高度の國家的統制が經濟に加へられ、所もこゝ數年は統制が振出されさうにも見えない有樣を見ては、人々は資本主義に對して重大なる疑ひをもたないわけには行かないのが當然である。かゝる有樣の下に、資本主義の動搖を感じ者はひとりアリストテーレに止まらなくなった。少かられぬ人々がこれを認みつゝあるのが、嘆かず不幸か、若定し得ない事實となって來てゐる。もしドメスチックと對立してゐるものとなって來てゐる。もし資本主義の動搖などと呼ばるものなら、危險思想家として取締られざるを得なかったが、今日では意味する所に相異はあるにせよ、資本主義の動搖を唱ばれ、それとも危險思想家の部類に加へられて仕舞ふのである。（然し斯ってゐるのがこれは不當である。今或んである所の統制國家は資本主義の動搖の上にあるのでも何でもない、資本主義の弊害の顯著なる場面に於て、それを除去せんとする以上に出てゐるものではない。資本主義はは自由主義に相對しいものであるが、人々が資本主義の運命を論じ、資本主義の行く手を論ずるのは今に始まったことではない。然し論究は近頃盛るし（盛）に行はるゝに至ったのみならず、傳（傳）べき理論的思想の影響を受けて、また我国に於ては特に此たびの戰爭時の經濟の影響を受けて、新なる動機をとるに至った。具體的に云へば、此論究は著しく擬人化されて来たのである。かつては此論究は專門家の間にしか行はれなかった。資本主義をけなす者は共產革命の理論家であり、イリタンであった。それを讃歌する者は國粉經濟學者であった。それが今や著しく變化して、大衆が此論究に參加してゐる。但し此の變化を受けなかった部類は無かったし、現に目下の戰時經濟の影響を受けない者もない。恐慌時にあっては、資本主義社會に特有な現象が大衆の眼前につきつけられた。ヨーロッパがサンパウロの神に救援された時、國粉に失された部類は、丁度小説がマルセイユの神に救援せられた部類が流（フ）ローリエの詩を行ったと同樣に、人々の胸に迫って、かゝる現象をあらしむる經濟組織に對して重大なる疑問をもたしめずには置かなかった。また戰爭の進行に物資を調達し、同時に戰後の生活を安定せしめんがために、相當に高度の國家的統制が經濟に加へられ、所もこゝ數年は統制が振出されさうにも見えない有樣を見ては、人々は資本主義に對して重大なる疑ひをもたないわけには行かないのが當然である。かゝる有樣の下に、資本主義の動搖を感じ者はひとりアリストテーレに止まらなくなった。少かられぬ人々がこれを認みつゝあるのが、嘆かず不幸か、若定し得ない事實となって來てゐる。もしドメスチックと對立してゐるものとなって來てゐる。もしドメスチックと對立してゐるものなら、危險思想家として取締られざるを得なかったが、今日では意味する所に相異はあるにせよ、資本主義の動搖を唱ばれ、それとも危險思想家の部類に加へられて仕舞ふのである。（然し斯ってゐるのがこれは不當である。今或んである所の統制國家は資本主義の動搖の上にあるのでも何でもない、資本主義の弊害の顯著なる場面に於て、それを除去せんとする以上に出てゐるものではない。資本主義はは自由主義に相對しいものであるが、

資本主義と云ふ言葉はたしかフランスの政治主義者ルイブランが初めて用ひたやうに私は記憶してゐるが、此段御用法から、近頃の用法に至るまで、此資本主義と云ふ語は、資本主義を批判し其缺點を指摘し代ふるに社會主義組織を打ち建てようとする目的のためのものであった。だが時期の組織制度であると見る者も稀もすれば我々と識資本主義と云へば、資本主義を意味してゐるやうな感じをもつ。また資本主義なる語を口にする人を見れば、我々はとかくかゝる人は共產主義者か何かのやうに考へ易かった。だが共產主義思想が全面的に後退した今日では、資本主義なる語は決點を表はすよりは、資本主義制度の本質其もの意味するやうに變って来てゐる。問題の核心に急ければならない。それにしても資本主義とはどんな本質を備へてゐるものなのであるか、シュムペーターの如きは、其多義なるに關みて此語の使用を避くべしとさへ云ってゐる。ホブソンの如きは定義を下すことなく、ポンヤリとした意味に用ひてゐる。それは寧ろ資本主義なる言葉の內容が多いのである。

先づ資本主義とは戰爭を根底とする經濟的個人主義であるとする定義がある。資本主義の概念に關する研究をなした、（Cl）は、資本主義を以て、自由に實質が行はるゝ部類を目的とし、自由に代つた機械に他ならないことになってゐる。唯も此の定義に於ては「かつての敵部に今日に於て其規を一にする。"Terrorism"が興へてゐる定義また之を五る事はない。彼によると資本主義制度は生產手段の所有者が他の生產的要因を結合するに出來るだけ多い利益を挙んとする目的を以てする生產組織である。

第二には、抽象的概念構成を離れて、資本主義を歷史上の或時期に於ける特殊的組織であると見る者がある。例へばHeckは、それを、資本が生產の本質的同一性を失ってゐる歷史上の一時期であると云へば、資本主義の特質は、資本の蓄積、分配、資本の集中、勞働の組織に於ける變化、資本と勞働との關係、資本主義の特質と資本の特質を以て其特質としてゐるとする。Lederは

社說

知性の創造性

日本は今一大轉換期に立つて居る。例へば政治上に於ては自由主義より國家主義へ、自由貿易より國家主義へ、力强い資源の獲得は經濟的、綜合的、國防の要求である。外に忠實で愛國の熱誠に燃える國家將來あり、內に銃後の護りを堅くする一億の國民あり、其の理想に邁進を續けて居る。

然るに此秋に當り今日知識階級の狀態はどうであるか。

物々知識階級は最も國家の根幹をなすものである。更に時と所のいづれを問はず、國家の改新運動を成し遂げたものは常に時代のインテリであつた。既に知識階級は今日國家の動力である。

然に於て我々は今の時代に於て何故に知識階級は貧しいであるかを創明して見なければなりぬ。

一體知識人を規定する一つの特質は知性の要求にある。然してその知性は始め自由主義により發展され、自由主義の民主的思想により先づ政治的知性であつた。そして、自由主義に於ても知性は所謂の間に於ても自由主義的な政治的知性となつて居た。顧いてマルクス主義思想及び民族的の時代であるヒューマニズムへの思想的改革にあつても、インテリの使命たる知性は常に依然として然りである。

かくして現下の知識階級は冷い政治的な眼を以て凡ゆるものを看過して居る。そして眼に入る一切のものを批判する。だが彼等はそれから逃さうとするか逃すこと能はずして生し得ることは唯批判のみ。

しかるに今の時代に於て我々の行手は多くの偶像の群によつて塞がれて居る。民族の偶像、階級の偶像、各種イズムの偶像、史觀の偶像の取れなくなつた偶像の群が我々の前に突き立つて居る。我々はこれを突破し現實に大地に足をつけて踏まねばならぬ。しかし批判的知性のみを以てしては一歩も踏くを得ないではないか。

知性はその能動性のみが必要特質ではない。知性の眼が知何に鋭くともそれが批判的知性に止まる限りその存在の意義はない。知性により新しい世界が開拓され開顯されて行く事によりその意義がある。我々はこれに知性の他の一面、創造的、綜合的知性を發揮せねばならぬ。

かくて現代の知識人は今こそ彼等の知性の改新を行はねばならぬ。批判的分析的なる知性の範疇に創造的、綜合的、活動的なるものが顯動する知性をしつかりと把握せねばならぬ。この二つの性質の綜合的發展によりそは偉大なる能動力となつて眼前の偶像は突破せられ新しい時代は開拓される。

かくて知性の改新行はれてこそ、今まで說つて居た知識階級は政治の意味を感じ、その指導力を保つて國家の開拓者たるの地位を確保するに拘るのであり、之こそ現下の緊要に結び合はるべきである。

所謂知識人は今こそ創造的、綜合的、活動的知性の把握は、先づ國家的、綜合的、國防的知性を以て、我々知識人が實力を以て、我々知識人が實

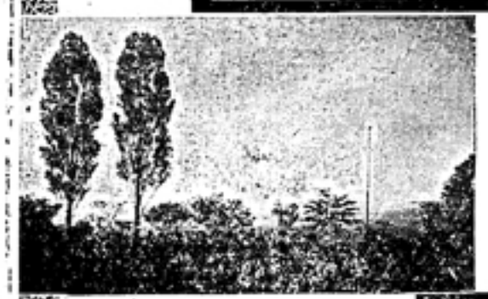
踏みなぎる我等若き知識人によつて行はれねばならない。

此處の發揮に「紅」を加し、皇國の發展に邁進せんとする國家の新時代、新しく建國の吉より一貫せる國家的、綜合的、國防的知性により生ずる指導力を以て、我々知識人が實

踐として立上り、全國民の興味ある國防の新途形をなるものがあらう。

明日の日本を担ふ若きインテリゲンチヤに期待される所また大なりとせねばならない。

勤勞アルバム



曉明に躍る

快き體操のリズム

朝露重き芝原踏んで

出は眞紅に出逸く

新な一日今ぞ迎へぬ

（午前四時半於校庭）

働く者のみ知る

國を思ひひとびとの

——めぞめは自分はリチンイリ——

汗の値ひ知やる君

汗の値ひ知やる君

振ふよ鍬を！

堅しき意志の發露よ

雲へん國　勞働を

青天井に響とんぼ

大地に撒け　勤勞詩

財政學の講義を松田講師擔當

—北大農經の權威—

（寫眞は大野教授）

大野教授の後任として北大農經の權威松田講師が擔當されることになつた。

秋を迎えて

紅葉の丘、清涼の山々

今ぞ若人の鍛錬時

十月上旬體育大會開催

學園の歡呼を浴びて

大野教授晴の征途へ

更に學生二名應召！

漢口へ！激戰また激戰

齋藤少尉名譽の戰傷

—銃彈を身に內地還送—

長川君の美擧

尾崎君應召

滿鮮視察旅行

感謝報告會

—於北海ホテル—

全國の權威一堂に會す

日本英文學會開催

—小林教授出席—

四連覇成らず

野球惜敗す

◇自家製品◇

西村の週末ケーキ

OUR WEEK-END SPECIALITY

（本質的な洋生菓子）

露人ザハロフニコライ製菓

新秋讀書のシーズンへ店當非是に共買賣

文屋書店

花園町第二大通り

新刊書籍雜誌

毎日入荷

丸文書店

花園町第一大通り

電話三三八六番

編輯後記

叙位及辭令

458
廿五日發行

戰爭と讀書

中野清一

七月

一

の末に東京へ出た。時局柄のことであるから、ある新聞社の座談會があつた。たまたま戰爭と讀書といふ題目に及んだ時、いくら戰時だからといつて特別に戰爭ものばかりを讀まなければならぬ理由はない、ふだんから讀書に親しんでゐる心構へをそのまゝもち續けて一向差支へないではないか、といふ風に主張した。皆くの間、議論はこの主張をめぐつて活潑に進行したが、最後には半ばしぶしぶ賛成する者が私にまわつて來た時、私はこういふ意味のことを言つた。

戰時體制下だからといつて特別な讀書法があるべきはずはない。若し戰時體制の進行といふ現實の存在を無視してゆかうとする氣持へを指してのことであるなら、この主張は感心できない。又若しこの反對に、戰時體制といふ現實を充分に考慮のうちにいれて、唯こういふ現實に直面したから讀書を進行させようとしてゐるのではないだらうか。なにも私はこう言きながら、こういふ態度はそれこそ戰爭の際に許はないものだなぞといつて、きめつけようとしてゐるわけではない。こういふ態度の根底には、どこかに、現實に對する一種の「食足れ主義」的な氣持へが潜はつてゐる樣に私には思はれるが、この點をいけないと言ひたいのである。

戰爭

は戰爭で、讀書は讀書だといふ一種の氣風？は男らしい樣にみえてそうではなく、悲觀的であるかにみえて樂觀的でもなんでもなく、唯總統的に自ら強い陽り、現實についての夢でなくてはならないし、理想とはいつても、やはり現實の理想でなければならぬとすると、現實を無視してかゝつての夢や理想は夢でも理想でもないのである。

二

戰時

體制の進行といふ現實を無視してかゝつて讀書を進行させるのはよくないと言へば、唯これだけの理由で、戰時下といふ現實に直接關係した書きものを讀むことは、ちがいゝとすゝめる方法もあるかの樣に印象されるかも知れない。もしそうだとすると私の本音から離れだ論。

戰爭は一の現實にすぎない。この現實が唯一の現實ではない。この一つの現實の後には絶つた彩の今一つの現實が控へてゐる。戰爭に關係しての所謂「きわもの」を爭つて讀むといふゆき方は、歷史の錯覺を不當にたちつてその一部面だけを唯一の全體であるかの樣に思ひこむ誤りに陥つてゐる。

戰時下の生活態度はそのまゝ戰爭のあとにくる現實にもまた適應しうる樣な風に彈力性のあるものでなくてはならないと思ふ。讀書生活を直接はなれて戰時下だからといつて特別に戰爭ものばかりを讀まなければならぬ理由はない、ふだんから讀書に親しんでゐる心構へをそのまゝもち續けて一向差支へないではないか、といふ風に主張した。皆くの間、議論はこの主張をめぐつて活潑に進行したが、最後には半ばしぶしぶ賛成する者が私にまわつて來た時、私はこういふ意味のことを言つた。

戰時體制下だからといつて特別な讀書法があるべきはずはない。若し戰時體制の進行といふ現實の存在を無視してゆかうとする氣持へを指してのことであるなら、この主張は感心できない。又若しこの反對に、戰時體制といふ現實を充分に考慮のうちにいれて、唯こういふ現實に直面したから讀書を進行させようとしてゐるのではないだらうか。場合にも別に特異なものがあるべきではないといふ意味の主張ならば心から非賛することができる。

こう

言つた後で私は最初の發言者にその何れなのだらうかを問いてみた。即ち出合せにも、無論君のいふ後の樣の主張だといふことだつたので、即ち私はホッとした。

然し落ついて考へてみる。戰時下であつたところで別に變つた新なる考へなくともよいと信じてゐる人々の大部分といふものは、矢張りこの戰爭讀書の現實から離れて戰をそむけようとする氣持への下に讀書を進行させようとしてゐるのではないだらうか。なにも私はこう言きながら、こういふ態度はそれこそ戰爭の際に許はないものだなぞといつて、きめつけようとしてゐるわけではない。こういふ態度の根底には、どこかに、現實に對する一種の「食足れ主義」的な氣持へが潜はつてゐる樣に私には思はれるが、この點をいけないと言ひたいのである。

戰爭

は戰爭で、讀書は讀書だといふ一種の氣風？は男らしい樣にみえてそうではなく、悲觀的であるかにみえて樂觀的でもなんでもなく、唯總統的に自ら強い陽り、現實についての夢でなくてはならないし、理想とはいつても、やはり現實の理想でなければならぬとすると、現實を無視してかゝつての夢や理想は夢でも理想でもないのである。

こういふ意識ほど他愛なく非史的時間感覚の中ばは戰爭が占めてゐる。それ許りではない、文明の進歩と輕々しく口にはいふものの、この戰爭の歷史的地位には微動だも示されてゐないのが現實なのである。若しそうだとすると、戰爭は一時的なものにすぎないのだから「永遠」を目ざしてゐる自分は戰爭と何の關係もなしに讀書生活を進行させると意氣ごむ人等は、最的にいつて二分の一の「永遠」を見たようにフンゾリ返つてゐるにすぎない。

現實

はやはり現實として大事にする必要があると思ふ。現實は一の變かな實時なのである。この實に關係しての所謂「きわもの」を爭つて讀むといふゆき方は、歷史の錯覚を不當にたちつてその一部面だけを唯一の全體であるかの樣に思ひこむ誤りに陥つてゐる。

私の長敬してやまない下敷氏、何かの機會に經濟原論的問題を經過しないで、例へば資本論を全部のことを後にしておもれたが味はべき前提で、殺して以度の減めとするに充分である。

ある

三

人が戰爭をもつて聞えたゞムメルに、讀書中態度を變えた時、氣分轉換にはどういふ方法が一番いゝかを味れた。ゾムメルはこれに答へて、現實といふものの面は實に千變萬化だ、この樣な面の一々に適應してゆく風に讀書なり思索なりを進めて行くものなら、氣分轉換はよどみなく進行するし、第一こうすれば氣分の轉立なぞ起るはずがないであらうと言つた。不斷の現實を超越して、人間の理想境へのボイダンスとなることに外ならない。

現實に直面して戰爭文學が書かれ、我々がそれを讀むことは當然の傾向であらう。しかしそのことから、戰時に於て戰文學を讀むことが悪いと云ふ理由は成立しない。

如何なる文學にせよ、それが無視し、無視することのない國の文化が如何に歪曲されようとも、文學には前進の歩き未質と內容があるからである。

今は

「行動」の時代である。

我々は何かしら鎖した氣分を感ずる。我々の文學に對する氣持の中には、まともに文學に向つて進むことを躊躇するやうな何物かがあるのではないか。

「行動」の時代に於ける文學者の意義の問題はかくして取り上げられねばならない。

（一）文化の

永遠なる夜明は何人にも否定出來ない事實である。

「行動」の時代だからと云つても、文化の永遠性は陽もられるものではない。

しかるに、我々は、文學に對する過日な我々の態度と探求心を「行動」の時代の名を借りて、無視する樣な言動をなす人があるのを見る。してまた我々自身も「無力」の念にかられたり、「無度」がられて「ある樣に感ずることがある。これもまみな文學に對する人々の、我々の「行動」が充分でないからである。

「行動」の時代だからと、文化の永遠性は陽もられない。

抽象のみが放置されねばならぬとふことはない。文學には文學の使命があり、獨自性があるからである。

枕木の

上に二本のレールが、果しなく續いてゐる。此の二本のレールの中一本が故障を生じても、枕木が壞れても、此の軌道は完全なものではない。

此等の各々獨自性をもつ枕木やレールは列車なるものに綜合せられて、始めて我々に役立つのである。然しながら、彼等が綜合せられたからとて、彼等の各々は決してその獨自性を失ふものではない。

枕木の一つ一つがその獨自性を失はずに、線路は不動となる如く、文化の各分野がその獨自性を失へば、その文化は決して健全ではないのである。

時局と文學

渡邊泰助

（二）文化の

各分野は獨自性を失つてはならない樣であつた。文化の各分野がその有つ獨自性を失つたなら、文化は文化でなく、文學の獨自性が滅びるのである。そして文化に於ける各分野の獨自性の喪失に會ふことは、單に文學のことにのみ關もられた問題ではない樣に思はれる。文化の各分野は唯無現像に、

枕木はなんと云つても枕木であり、それは決してレールではない。人は往々にしてこのことを忘れる。枕木はレールと異なつた本質と機能を綜合する綜合せられた名の下に存つのである。文化も此の樣に獨の獨自性を有つのである。文化の分野は深山あるであらう。しかしその各分野は、文化なるものに綜合せられてはゐるが決してその獨自性を失つてゐるものではない。

（三）かくして

我々は「行動」の時代に於て獨自性を失はずに文學に於て文學の獨自性を失はずに文學の時代に於て獨自性を失はずに文學の獨自性を失はしめるのみである。

我々は

（四）

文學のたゞべきことは、現實に深く根を下し、その時代の現實を理想境へのボイダンスとなることに外ならない。

現つて、戰時に於て戰爭文學が書かれ、我々がそれを讀むことは當然の傾向であらう。

しかしそのことから、戰時に於て戰文學を讀むことが悪いと云ふ理由は成立しない。

如何なる文學にせよ、それが無視し、無視することのない國の文化が如何に歪曲されようとも、文學には前進の歩き未質と內容があるからである。

文學のたゞべきことは、現實に深く根を下し、その時代の現實を理想境へのボイダンスとなることに外ならない。

現つて、戰時に於て戰爭文學が書かれ、我々がそれを讀むことは當然の傾向であらう。

しかしそのことから、戰時に於て戰文學を讀むことが悪いと云ふ理由は成立しない。

如何なる文學にせよ、それが無視し、無視することのない國の文化が如何に歪曲されようとも、文學には前進の歩き未質と內容があるからである。

戰爭

と文學を切り離すことは、文學を切つてはならない樣であつた。文化の各分野がその有つ獨自性を失つたなら、文化は文化でなく、文學の獨自性が滅びるのである。そして文化に於ける各分野の獨自性の喪失に會ふことは、單に文學のことにのみ關もられた問題ではない樣に思はれる。文化の各分野は唯無現像に、

して行くかを想像出來る。

人々は氣分がすして文化を否定することになるであらう。文化の各分野がその有つ獨自性を失つたなら、文化は文化でなくなるのである。そして文化の一分野であるならば、それは政治の否定にもなるのである。

文學

は、「行動」の時代に於て獨自性を失つてはならない。

文學は、政治性に使つて健されたと云ふ點で論れるものとされた。此の傾がよく示す樣に、戰時の時代にあつても、皮相的に、感情的にのみ、政治の見下に身を投げかける文學は、その文學的價値を不健康たらしめる結論にあるのである。

文學は文化の他の如何なる分野もが有つことの出來ない形式があり、效用がある。

プロレタリア文學は、

その文學性が、政治性に使つて健されたと云ふ點で論れるものとされた。此の傾がよく示す樣に、戰時の時代にあつても、皮相的に、感情的にのみ、政治の見下に身を投げかける文學は、その文學的價値を不健康たらしめる結論にあるのである。

文學は文化の他の如何なる分野もが有つことの出來ない形式があり、效用がある。

文學

は、政治性に使つて健されたと云ふ點で論れるものとされた。此の傾がよく示す樣に、戰時の時代にあつても、皮相的に、感情的にのみ、政治の見下に身を投げかける文學は、その文學的價値を不健康たらしめる結論にあるのである。

文學は文化の他の如何なる分野もが有つことの出來ない形式があり、效用がある。

讀書雜感

濱林生之助

藝術は長く人生は短し、一冊の書物を讀む。一冊の書物を讀むのは他の長十冊、長百冊の讀書に於て與るものは書物の讀書に於て與るものは書物の讀書に於て與るものは書物

蒼白き路

アンブローズ・ビアース　飛塚誠一譯

（承前）

わしのものではなかった――全ての人に惠まれてあれ。

巫女の口を借りた百合枝の告白

――私は早くより寂寞に入り、間もなく安らかな眠りに陥りました。

私は突然、その安らかな眠りより何とも言ひ難せぬ恐ろしさに驚られて眼を醒ましました。其は私達が幼い時々よく感ずるあのとりとめのない恐ろしいものです。私は、そんな恐ろしさの、何の意味もない事を考分知つては居りましたけれども、其を、その時に限つて、すぐ打消して仕舞ふ事は、出來なかつたのです。夫は、恐怖で在使徒は外の部屋で寝てゐました。

それにも拘らずその恐ろしい恐怖心は、戸の外に潜んでゐるあもしれぬ魔性のものに、私がこゝに居る事を、戸の外へ洩れる光が知らせる事になるからです。来た魔性を驚ろも移ぬ、そして又想像の作り出す恐怖に因はれ居いあなた方は、宜敷恐な夜の闇の中で、苦めるのはどんなに恐ろしいものであるかを御存知せう夜は、見えざる敵を闘す。

の中の敵略。

私は夜衣をひつかぶり、助けを呼ぶ事も出來ず折る事さへ忘れ果て、打震へつつ床の中に横つてゐました。私は只管時のゆり〳〵すぎてゆくのを待つてる外ありませんでした……いえ、この世界には時……いえ、……遂にやつて来ました。階段を昇る、ひそやかな足〳〵しい足音。

自分の路の分らぬものやう、自分の路の分らぬ。今日はもう暗黒した理性しか持たぬ私にはそれが怒つて哀れの情しみがゆり〳〵と迫つてくるやうに思はれて、一層恐しかつたのです。

夜の妖性の手探りを避ける爲燈をともしたまゝ、私は部屋前に燈を置かうと、考へました。前に何を恐れた私が。でも外恐怖は理性を持たぬ。……恐怖の響く単独な動音。……私達はこのことを、良く知つてゐます。この私達、恐怖の感覺の移り来て現世の感覺の間の永遠なる罪の中に潜む。

私達は、みな互に恐を知りて、恐れ、恐する人と語らんと欲しても語り得ず、同じ恐する人は、自分の恐れ、自分もその人を恐れて。

でも時として、この世界と現世を分ける法の消える時があります。愛憎は、憎しみの強い力に依つてこの現世の滅れる時があるのです。

私達は、私達の眠めてあげたい人や家のひかれる人や減は又憎む人達に、その愛を見て貰えるのです。どんな愛でと仰しやるのですか。私達もどんな愛でその人達より見られるのかは分りません。只愛し愛されたい人達の眼にも私達が恐ろしく見えるのは何と悲しいことでせう――つまらぬ合戦をおゆし下さい。

え！　いえ私達はともあなた方の現世の世界の外は何も知らないのです。でも、この世界と現世を分ける法の消える時があります。愛憎は、憎しみの強い力に依つてこの現世の滅れる時があるのです。

私達は、私達の眠めてあげたい人や家のひかれる人や減は又憎む人達に、その愛を見て貰えるのです。どんな愛でと仰しやるのですか。私達もどんな愛でその人達より見られるのかは分りません。只愛し愛されたい人達の眼にも私達が恐ろしく見えるのは何と悲しいことでせう――つまらぬ合戦をおゆし下さい。

え！　いえ私達はともあなた方の現世の世界の外は何も知らないのです。でも時として